

東日本支部だより

2008年3月5日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

定例研究会のお知らせ

◆東日本支部第36回定例研究会

時 2008年3月15日(土) 午後1時30分~4時45分

所 お茶の水女子大学 共通講義棟2号館102教室

(地下鉄丸の内線 茗荷谷駅下車 徒歩7分)

(ご来校の際は身分証明書をお持ちの上、正門をご利用

ください)

○2007年度 卒業論文発表 (その1)

1. 浅草サンバカーニバルにみる地域振興の変容

小山 麻奈 (桐朋学園大学)

2. 有東木(うとうぎ)の盆踊りの音楽的分析

上田 友梨 (東京芸術大学)

3. 近世藩校における音楽の研究

井土まりこ (東京芸術大学)

4. 明治・大正期少女雑誌にみる「音楽」と女学生

—『少女の友』を中心に—

松原 恵 (東京芸術大学)

○2007年度 修士論文発表 (その1)

1. 現代日本の学校教育における和楽器実技教育の可能性

—箏を中心に—

クリコフ・マキシム (東京芸術大学大学院)

2. 出版物からみた箏の社会的位置づけ

—江戸期から明治期にかけて—

森田 敬子 (東京学芸大学大学院)

3. ロシア連邦サハ共和国の口琴ホムスの音楽

—演奏家の活動を通して—

山下 正美 (お茶の水女子大学大学院)

4. 学校教育における「世界の諸民族の音楽」を素材と

した指導の研究

山口 かおり (国立音楽大学大学院)

司会 配川美加 (東京芸術大学)

◆東日本支部第37回定例研究会

時 2008年4月5日(土) 午後1時30分～4時30分

所 東京芸術大学音楽学部 5-301教室

(JR上野公園口または地下鉄千代田線根津駅下車)

3. 明治初期の横浜居留地における音楽演奏の場

—横浜ゲーテ座を中心に—

橘川友里(お茶の水女子大学大学院)

4. 仙台藩能楽史における金春大蔵流について

田村 にしき(東京芸術大学大学院)

○2007年度 卒業論文発表(その2)

1. イスラームの礼拝儀式的構造と音楽

—ウマイヤ・モスクのアザーンを中心に—

宮森 庸輔(武蔵野音楽大学)

2. 催馬楽の演奏伝承とその変遷について

—古譜と現行曲の音楽分析を通して—

本塚 亘(法政大学)

3. 革命現代京劇《紅灯記》の研究

荻野 珠(東京芸術大学)

4. 英米における能受容の変遷

山下暁子(お茶の水女子大学)

司会 岡崎淑子(聖心女子大学)

定例研究会の報告

◆東日本支部第34回定例研究会

時 2007年12月1日(土) 午後2時～4時30分

所 東京芸術大学音楽学部 5-301教室

司会 早稲田みな子(東京芸術大学)

●研究発表

1. 盲僧琵琶の誕生 —松浦市と菊池市の琵琶を例に—

薦田 治子(武蔵野音楽大学)

○2007年度 修士論文発表(その2)

1. 1980年代末の中国におけるポピュラー音楽ブーム

「西北風」に関する研究

陳 琳(東京学芸大学大学院)

2. 黒川能の現代史研究

柴田 真希(東京芸術大学大学院)

(発表要旨)

長崎県松浦市と熊本県菊池市の盲僧琵琶の調査結果を紹介し、九州北部の盲僧琵琶が、形態的には平家琵琶から生まれたと考えられることを指摘した。発表者は、盲僧琵琶の楽器が、平家琵琶を三味線風に改造することによって江戸中期に生まれたという仮説を持っており、薩摩地方の盲僧琵琶が平家琵琶から生まれたと考えられることはすでに指摘している(「薩摩盲僧琵琶の誕生と展開」2006)。

松浦市今福の琵琶は、『今福郷土史』(金子武巧著 1919)によれば、肥前松浦氏の祖である源久に従っていた琵琶法師が持ってきたものという言い伝えがある。江戸時代に大漸寺と称した盲僧寺に伝えられたもので、今日では胴の一部しか残っていない。しかしその輪郭、材の重さ、胴の繰りの浅さ、遠山の曲線の状態といった形態上の特徴は、北九州の盲僧琵琶よりむしろ平家琵琶との類似性を強く示す。また、菊池市の琵琶は、森北地域の一族によって「先祖祭」という行事の折に床の間に飾られる。1794年渋江公正が著した『菊池風土記』には、この琵琶は菊池の盲僧(「仏説派の盲人」)の祖である筑前が所持したものと記される。現存する琵琶を調査した結果、平家琵琶よりは一回り小ぶりだが、琵琶各部の輪郭が平家琵琶の特徴をよく残している一方で、反手と頸の接合の仕方や、乗弦が反手と一木で作られている点など、筑前盲僧琵琶と共通する特徴も持っており、平家琵琶が盲僧琵琶へと変化し始めた初期の形を示していると考えられる。松浦、菊池両地の琵琶は、付随する伝承から、ともに、本所を獲得するための盲僧の起源伝承の作られた時期、すなわち、盲僧座が形成される18世紀の盲僧琵琶の形態を今日に伝えるものと考えられる。その形態を調査した結果、きわめて平家琵琶に近いものであったことから、九州北部の盲僧琵琶は平家琵琶から生まれたとみなしてよいと考える。

なお、盲僧琵琶は、雅楽琵琶と異なる琵琶が中国大陸から渡来したという従来の説は、近世・近代の盲僧の姿を、古代中世に遡らせて考え出されたものである。このことから、「盲僧」という用語を古代や中世に遡って不用意に用いるべきではないという点も指摘した。

(コメント・蒲生美津子)

楽器「盲僧琵琶」の成立と系譜について、筑前地域に焦点

を当てた研究発表。薦田氏が2002年以来主張している学説を補強する発表で、時間50分、質疑10分。A3配布資料2枚(発表進行、参考文献、「今福郷土史」「菊池風土記」の抜粋)と画像(大漸院蔵琵琶断片、菊池風土記別本の琵琶図など)及び持参の菊池市森北の琵琶レプリカを示しながら論じた。

ジョージ・ギッシュ氏から、今回の発表が盲僧琵琶の楽器面の発表であることの確認と、音楽面における平家琵琶と盲僧琵琶の影響関係について質問があり、薦田氏は以下のように説明した。発表は楽器。音楽的には、薩摩琵琶はギッシュ氏も指摘の通り平家の影響がある。筑前琵琶は薩摩琵琶と三味線音楽を取り入れている。そもそも楽器筑前盲僧琵琶は、琵琶で三味線音楽を弾くということから変形した。どれだけ三味線化するかが観点となる。薩摩地方は本州から遠隔のため、中央の三味線音楽の影響は顕著でなくローカルな様式が発達した一方、筑前地方は上方と近質の音楽文化を持っていたため、琵琶も三味線に近い形態になり、最後には三味線に似た笹琵琶が生まれた、と考えている。

2. 両大戦間期の日中ハーモニカ界

—大衆音楽から見た日中関係史—

尾高 暁子(東京芸術大学)

(発表要旨)

ハーモニカ音楽は両大戦間期の日中両国で一世を風靡した。ブームの担い手は都市部に台頭した新中間層である。量産品で安く、習得しやすいハーモニカには大衆に受け入れられる下地があったが、それを急速に浸透させたのはパイオニアの組織的な普及活動だった。ハーモニカは、商業主義にもとづく物とメディアの大量消費を前提とする近現代大衆文化の申し子である。かつて大きな社会的影響力をも

ったが、ハーモニカ音楽の関連研究はさきわめて乏しい。そこで今回は以下の諸点について、両国ハーモニカ界の軌跡を概観した。

1) 普及システムと状況:パイオニアの主要な普及活動は、同好組織の結成、バンド結成、ラジオ映画出演、レコード吹込み、同人誌や教則本、楽譜の刊行、コンクール主催など多岐にわたる。ブーム以前から国産楽器があった日本では、普及活動は楽器会社主導で進み、これに属する愛好組織も対立しがちだった。反面、優れた指導者が楽器会社の支援を受け、輸入品をしのぐ製品を開発した。対する中国では、上海を中心とした知識人による大衆啓蒙運動に始まり、楽器会社の縛りはなかった。ただし国産楽器の製作は、組織力の欠如等により遅れをとった。

2) ハーモニカ音楽の役割: 両国とも大衆の本格的な洋楽受容の媒体となった。専用曲のないハーモニカはどんな音楽でも基本的に演奏でき、初めはその効果が新鮮な魅力と考えられた。だが時代を追うごとに、「どれにでも当てはまるが、どれもでない借物」の音楽性が、人々の関心を色あせさせ、ハーモニカ離れを招いた。日本ではこの理由で昭和初期からハーモニカ音楽の停滞が始まった。一方ブーム自体が遅れて始まった中国では、教材・奏法ともに日本の蓄積が短期間に流れ込んだので、1930年代後半に若干の停滞感があったものの、日本ほど深刻に受け止められた形跡はない。

また戦時下では、両国とも大衆の健全な娯楽の必要性から、停滞気味だったハーモニカ音楽が重視され、大衆音楽のヘゲモニーを再び獲得した。しかしそれは、国家や政治思想へのコンフォーマティビーを基調とし、画一化された音楽であって、本質的には過去の光輝をとり戻せなかった。

3) 両大戦間期の日中ハーモニカ界の交流: 一定の交流は認められた。だが中国側が日本の教材や情報を積極的に利用したのに対し、日本側は中国側の普及活動に対しては

無関心か、脱亜入欧に基づく蔑視観が目立った。

(コメント・伏木香織)

本発表は、これまで研究がほとんどなされてこなかった中華民国期(1910～30年代)の上海における大衆音楽であるハーモニカ音楽について、日中両国の歴史的、社会的脈絡に注目した新たな研究の可能性を示したものであった。新中間層(階級)に広まり、マスメディアをも駆使して推進され、洋楽受容の受け皿となった音楽は、戦時下にあつて日本で「厚生音楽」として利用された一方、上海では抗日運動の資金集めのチャリティとなるなど相違点もみられるようになっていった。戦後、両国間で交流がなかったわけではなかったが、日本は「脱亜入欧」路線にあつて中国のハーモニカ界に対し無関心になり、一部には見下した視点も見られるようになったという。会場からは、ハーモニカを演奏する人の日中の違い、ハーモニカの中国での普及に関する積極的な日本の影響、教材、ヨーロッパの影響など、多くの質問があり、このテーマに関する関心の高さが窺われた。

◆東日本支部第35回定例研究会

時 2008年2月2日(土)午後2時～4時40分

所 東京芸術大学音楽学部 5-301 教室

司会 金光真理子(埼玉大学)

●研究発表

1. 地歌《まの川の川》における歌詞と音楽の関係

—Eero Tarasti の記号論の観点から—

フベルトス・ドライヤー(東京芸術大学)

(発表要旨)

地歌において、その音楽が歌詞の意味を反映しているところがあることはいくつか知られているが、音楽と歌詞の関係を体系的に分析する方法は今だ存在していない。そこで、Tarasti の有名なショパンの“Polonaise Fantasie”についての分析から幾つかの要素を借用しながら地歌の歌詞と音楽の関係について体系的な分析方法を思案した。

Tarasti が提案した概念の中で、主に次の二つを地歌に当てはめることができる：1. 意味論的な軸、2. “Narrative Program” (NP)。《ままの川》の歌詞における意味論的な軸(1. 希望(愛) - 幻滅(失恋)；2. 安定した感情 - 不安)さらに、幾つかのNPを確定することは、問題を生じさせるものではない。が、地歌においては、流派によって歌の旋律がかなり異なるので、その歌詞の意味論的な軸に相応する音楽上の軸を定義する際に、音楽上の軸が流派による差異に影響を受けないよう注意する必要がある。次の三つの音楽上の軸がこの条件をみたすだろう。

1) 旋法の変化(転調)：都節音階を目安とし、その音階が二つのディスジャンクトのテトラコルドからなされていると考えると、上半のテトラコルドを出発点にしてもう一つ別の都節音階を作ることができる。前述の音階を「0」のレベルで称し、後述の音階を「+」で称する。同様に(《ままの川》に現れる音階に限って)、「++」、また「-」のレベルの音階を得ることができる。こういった音階のレベルは、歌の旋律の流派による差異に作用されないが、歌詞の意味を細部まで反映する。

2) 核音 - 中間音：《ままの川》の歌詞が安定した感情、または感情が安定した状況(希望)を表す時は、三味線の旋律においては核音が比較的多く、逆の場合、すなわち歌詞が不安などの感情を表す時は、旋律に中間音が多用される。歌の旋律において、核音と中間音の分配が流派によって異なると推測するかもしれないが、実際は、宮城会から出版さ

れている楽譜と正派の楽譜のバージョンの間には、この点に関しては大きな差異は見つからなかった。

3) 関テキスト性：いくつかの箇所においては、《ままの川》の音楽は他の地歌の曲を引用するように見える。こういった引用によって、歌詞の意味をより深い次元で表現しているかもしれない。

(コメント・福田千絵)

Tarastiの記号論については、発表者のかみくだいた説明にもかかわらず、地歌の分析にどのように関わるのか十分に理解できなかったが、本題の地歌の分析は明快であった。核音と中間音から成る階層的な4種の旋法をツールとして、全曲にわたって旋律を区分し、特徴的な部分について歌詞と結びつけて説明することに成功していた。地歌における、核音に注目した分析の有効性が示され、研究史に一石を投じるものであったと思う。すでにほかの曲にも適用し、作曲家別の傾向もつかんでいるように推察された。フロアの質問は、歌と手事の分析方法のちがいと、三味線の調弦を考慮しないことについてであったが、発表者は、歌も手事も同じ方法であり、調弦は作曲者には二次的なことがらだった可能性があると答えた。フロアの問いかけは、先行研究に照らして必然であり、地歌の楽曲構造にかかわることでもあるので、今後、研究が継続され、この点についての考察が発表されることを期待したい。

2. ヒンドゥー教の婚礼歌の歌詞と音楽構造

— 歌と感情表現の行為との関連性に関する一考察 —

丸山 洋司(東京芸術大学大学院)

(発表要旨)

ヒンドゥー教徒にとって婚礼は、最も重要な通過儀礼とされる。婚礼にはさまざまな儀礼次第があり、それらは約一週間にわたって執り行われる。儀礼次第が執り行われる際には、女性たちが集団で歌を歌う習慣が古くからあった。ヒンドゥー教の婚礼歌に関する先行論文では、儀礼次第によって、歌われる歌の歌詞が異なった感情を表現していることへの言及が見られた。しかし歌の音楽的側面に着目する場合、歌詞の表現している感情は、旋律やリズムの構造や歌が歌われる速度なども深く結びついていると思われる。本発表では、最も保守的なヒンドゥー教の農村社会が維持されている地域の一つとされる、北インド東部のミティラー地方に伝承される婚礼歌をとりあげ、歌詞と音楽構造と感情表現の行為との間の対応関係について考察する。

本発表ではまず、ミティラー地方において婚礼がどのような過程をもって行われるかについての概略を説明した上で、婚礼の過程でどのような感情を表現する歌詞の歌が歌われるかを示す。ここでは、結婚式の準備期間には花嫁と花婿のそれぞれの家で、結婚の成功を祈願するために神への賛歌が歌われること、花嫁の家で行われる結婚式では花婿と彼の親族をからかう内容の歌が歌われること、結婚式の後半から花嫁が生家を去るまでの間には花嫁への同情と、彼女と別れを惜しむ感情を表現する泣き歌が歌われることを明らかにする。その上で、「祈り」「からかい」「泣き」という感情表現の行為と歌の音楽構造との関連性を、採譜に基づく音楽分析によって具体的に示す。

分析結果として示したい結論は以下の通りである。旋律構造については、「祈り」「からかい」「泣き」の歌のすべてに共通して、上行するときに跳躍進行、下行するときに順次進行あるいはジグザグ進行が見られる。リズム構造については、「祈り」の歌の歌唱の際には、歌唱者には拍意識が存在すると思われるが周期性に対する意識が希薄である。また「から

かい」の歌は八拍一周期または六拍一周期、「泣き」の歌は3+2+2の七拍一周期によっていることが多い。速度については、「祈り」の歌はゆったりとした速度で朗々と歌われるのに対し、「からかい」の歌は会話で話すときに近い速さで歌われ、「泣き」の歌は両者の中間の速度で歌われるが、リズムが崩れやすい傾向がある。

(コメント・田中多佳子)

研究対象としても研究手法としても筆者自身の研究に大きく重なるため期待して聞いた。発表自体はきちんと準備され視聴覚資料も用いて手際よく行われた。しかし、筆者が確認する間もなく会場から多くの質問が集中したのは、要するに、観察事例の絶対数と観察の質、情報収集法や収集データの分析手順が極めて限定的であるのに対し、導き出そうとする結論が飛躍しすぎではないかという点である。

そもそも一地域の婚礼歌の特徴を論じようとするなら、同地域の一連の通過儀礼歌や日常的に歌われる歌、他地域の婚礼歌との比較分析は欠かせまい。歌詞と音楽構造との関係の考察に、「散文である」として歌詞原文の韻律構造の分析なしに歌詞大意を用いるのも疑問である。まして説明の際にサンスクリット語のシュローカ(頌詩)の韻律やヴェーダの朗誦法などを例にひくなどナンセンスである。研究者が少ない分野であるので継続的研究が切に望まれるが、まずはヒンディー文学研究・儀礼研究など多分野にわたる先行研究の成果の検証し直しを求めたい。

3. 「国民音楽論」から「日本的作曲」論へ

—1930年代の創作に関する一考察—

熊沢 彩子(東京芸術大学大学院)

(発表要旨)

昭和5年前後から、新興作曲家連盟などに象徴される若い作曲家の活動が活発化し、その動きに連動して作曲と「日本」との関係に焦点をあてた論が出現してきた。本発表は、これらの作曲に関する言説を音楽系の雑誌論文などから辿っていくことで、昭和初期の作曲行為と作曲家のナショナリティとの関係の捉え方を考察するものである。津川圭一、箕作秋吉などにみられる初期の「国民音楽論」に通底するのは、国民音楽の勃興が国家的な「事業」であるという意識であり、その実現のために規範とするのは西洋の作曲の方法だということである。ここでは特に「ドイツ・アカデミズム」的な音楽を規範とし、その発展の方法をロシア国民楽派に学ぼうとしている。

しかし、音楽学校の本科に作曲部が設置され、昭和7年に音楽コンクールが開催、また昭和9年からロシア人作曲家アレクサンドル・チェレプニンによる諸事業が展開されるなど、作曲を学び、発表する環境が整うと、日本の作曲の状況は新たな展開を見せる。とくにチェレプニンによる作曲家への啓蒙活動や支援事業は、日本人作曲家に大きな影響を与え、チェレプニンが刊行した日本人作曲家の作品を中心とする楽譜集では、チェレプニンの「民族的なもの」を重視する考えに呼応するかのように、日本の祭りや民謡を題材としたものが多く出現した。そしてこれらの作品は欧米で刊行され、そこでの評価が日本に報道されるに従って、作品の日本での評価や権威が決定付けられるという事象がみられた。

その一方で、これらの状況を受けて作曲をめぐる言説も盛んになるが、大半はその「日本的作曲」的傾向への批判が主であった。そして批判の論旨は以前からの「国民音楽論」的な考えに依拠するものであった。すなわち、「国民音楽論」と「日本的作曲論」で作曲に求められたのは、西洋の

アカデミックな技術の習得であり、それを習得してはじめて西洋と肩を並べ、日本独自の音楽が作り出せる、という思潮を内在していた。しかし、実際の創作において意識されたのは「日本的なるもの」であり、しかもそれは、西洋での高評価によって、日本で権威を得るといった性格を持つものであった。つまり当時の創作の指向と、それを「日本的作曲」と断じた言説は、互いに目指す方向が異なるにもかかわらず、そのどちらもが西洋の権威を意識しているというねじれ現象がみられるのである。

(コメント・河西恵里)

本発表は、日本人作曲家グループによる活動の開始時期にあたる昭和初期に焦点を当て、同時代の主要な音楽雑誌に寄せられた作曲論を辿りながら、作曲行為と作曲家自身のナショナリティをめぐる問題を捉える。ここで参照する作曲論は、評論家や国文学者など作曲家以外から寄せられたものも対象とし、問題の全貌をより包括的に概観する。熊沢氏は、この時期に多く言及された日本における作曲の問題を、寄稿者らの言葉を用いて「国民音楽論」から「日本的作曲論」へという時間軸で捉えるが、同じ言葉を用いても、論者によって批判の対象やめざすべき目標がそれぞれに異なっている点を一次資料の解読によって整理した。また、清瀬保二ら多くの作曲家たちに大きな影響を与えたロシア人作曲家チェレプニンの功績を認める一方で、「国民音楽の実現」を謳いながらその評価を「西洋からの承認」に委ねるといった矛盾点を指摘、現代にも連なる問題としての視点を提示した。

お詫びと訂正

前号(第15号)の東日本支部だよりに、下記の誤りがありました。訂正してお詫び申し上げます。

〔1頁〕 東日本支部第32回定例研究会

(誤) 2006年6月16日→(正) 2007年6月16日

(誤) 1. 琵琶楽の保存と敬称→(正) 1. 琵琶楽の保存と継承

〔4頁〕 東日本支部第33回定例研究会

(誤) 2006年7月7日→(正) 2007年7月7日

会員の声

○Musica Humana 創刊のご案内

韓国の音楽学研究所(所長:李碩遠)は、2009年にMusica Humanaという査読付き雑誌を創刊します。MHは音楽を人間の精神、コミュニケーション、社会文化的産物と見なし、経験科学、社会学、歴史、美学等を含む多くの分野で、世界中の国から投稿を期待しています。英語での投稿を年中受け付けますが、創刊号の締め切りは2008年5月31日です。詳しくは<http://musicologykorea.org>を参照、またはmusicahumanajournal@gmail.comへご連絡下さい。

(ヘルマン・ゴチェフスキ)

会員の声 投稿募集

1. 次号締切: 2008年4月30日(5月初旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

学会本部事務所(郵送、Fax またはメール)

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル 307号

Fax: 03-3832-5152 E-mail: LEN03210@nifty.com

3. 字数および書式: 25字×8行以内(投稿者名明記のこと)

4. 内容:会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、書籍出版、展示、見学会など、会員の皆様に知らせたいと思う情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

* 原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただくことがありますので、ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

発行: (社) 東洋音楽学会東日本支部

編集: 塚原康子、尾高暁子

近藤静乃、前原恵美、熊沢彩子

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

東京芸術大学音楽学部楽理科 塚原研究室気付

Tel: 050-5525-2357・2350 Fax: 050-5525-2522

E-mail: tsukahar@ms.geidai.ac.jp (塚原)
